愛努民族與考古學：原住民考古學實踐之可能性

アイヌ民族と考古学：先住民考古学実践の可能性

The Ainu People and Archaeology: the Possibility of Archaeological Practices for Aborigines

文・圖 | 加藤博文 KATO Hirofumi
（北海道大學愛努 先住民研究中心教授）
譯者 | 陳由瑋（政治大學民族學系博士生）

文責・図 | 加藤博文 KATO Hirofumi
（北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授）
訳者 | 陳由瑋（政治大学民族学学科博士後期課程）

2013年から始まった「イランカラプテ」キャンペーンのロゴマーク。アイヌ語とアイヌ文様を組み合わせたデザインを使用し、アイヌ語の「こんにちは」で北海道の特色を押し出している。（出典：「イランカラプテ」キャンペーン推進協議会 http://www.irankarapte.com/）

2013年迄今產官學合作舉辦的irankarapte活動標誌。設計概念結合了愛努語與愛努紋樣。以愛努語的您好打造北海道的當地特色。（圖片來源:「イランカラプテ」キャンペーン推進協議 http://www.irankarapte.com/）

北海道の博物館では、一般的に知られる日本史、あるいは本州島以南の歴史とは異なる歴史年表が掲示されている。北海道島の歴史は旧石器文化から縄文文化まで本州島と同じ歴史の流れを辿るが、それ以降は続縄文文化、オホーツク文化そして擦文文化という本州島以南の歴史には登場しない北海道島独自の考古文化が設定されている。本州の歴史と比較した場合、最も大きな違いは、それらの先史文化に続く13世紀以降に「歴史アイヌ文化期」（いわゆる「アイヌ文化期」）という

在北海道的博物館館內，有展示著與一般所知的日本史，或是與本州島以南歷史相異的歷史年表。北海道島的歷史從舊石器文化到繩文文化為止，與本州島歷經相同的歷史過程，但之後續繩文文化、鄂霍次克文化與之後的擦文文化，則未出現在本州島以南的歷史之中，故被設定為北海道島獨自的考古文化。與本州歷史比較的情形時，最大的差別是，冠上特定民族的名稱，設定「歷史愛努文化期」（即所謂的「愛努文化期」），來接續之前所提的先史文化，

本州と北海道の文化史編年
本州與北海道的文化史編年

<table>
<tr><th>年代</th><th colspan="2">本州</th><th colspan="2">北海道</th><th>年代</th></tr>
<tr><td rowspan="9">1868 年
1603 年
1185 年
710 年
200 年
0 年
前 300 年
前 15000 年
＞ 前 40000 年</td><td>明治時代</td><td>明治時代</td><td colspan="2">明治時代　明治時代</td><td rowspan="9">1868 年
13 世紀
12 世紀
7 世紀
5 世紀
前 3 世紀
前 12000 年
前 35000 年</td></tr>
<tr><td>江戸時代</td><td>江戸時代</td><td colspan="2">歷史愛努文化　歷史アイヌ文化</td></tr>
<tr><td>鎌倉・室町時代</td><td>鎌倉・室町時代</td><td rowspan="3">擦文文化
擦文文化</td><td rowspan="3">鄂霍次克文化
オホーツク文化</td></tr>
<tr><td>奈良・平安時代</td><td>奈良・平安時代</td></tr>
<tr><td>古墳文化</td><td>古墳文化</td></tr>
<tr><td>彌生文化</td><td>弥生文化</td><td colspan="2">續繩文文化　続縄文化</td></tr>
<tr><td>繩文文化</td><td>縄文文化</td><td colspan="2">繩文文化　縄文文化</td></tr>
<tr><td>舊石器文化</td><td>旧石器文化</td><td colspan="2">舊石器文化　旧石器文化</td></tr>
</table>

特定の民族の名前を冠した文化段階が設定されている点にある。

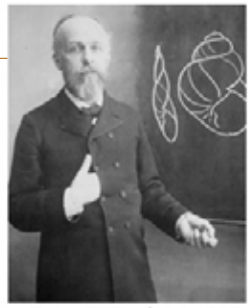
文字による歴史が少なく、アイヌ民族自身による書かれた歴史を持たない北海道島では、発掘により得られる考古学資料に基づいて歴史が構築されている。北海道の歴史は、考古学資料により構築された歴史が民族誌の時代に直結している点にその特徴を見ることができる。この特徴は日本の他の地域には見られないものである。ゆえに北海道史は、そのままアイヌ民族史と言い換えることも可能である。

做為13世紀之後的文化階段。

北海道島因為文字敘述的歷史較少，也沒有愛努民族本身所書寫的歷史，所以該島所建構的歷史，是立基於挖掘所取得的考古學資料。北海道的歷史，可看出其特徵是透過考古學資料所建構出的歷史，是直接連結民族誌時代。這項特徵是日本其他地區所看不到的。所以北海道史換句話說，可以說本身就是愛努民族史。

石器時代人論争に参加した外国人研究者たち

參加石器時代人爭論的外國學者們



E.S.Morse (1883-1925)

H.v.Siebold (1852-1908)

J. Milne (1850-1913)

考古学者や人類学者にとってのアイヌ民族

文字資料が限られている北海道島では、その歴史の解明に考古学が果たす役割は大きい。その一方で考古学資料に基づいて構築される北海道島の歴史が、この島の歴史の当事者であるはずのアイヌ民族の視点で描かれることはなかった。北海道島の歴史の多くは、他者の視点から描かれてきた。

北海道島の先住民族であるアイヌ民族は、近代国家日本に人類学や考古学が誕生した19世紀末より、研究対象でありつづけた。日本列島の石器時代人が誰であったのかという論争は、E.S.モース(1838-1925)やH.V.シーボルト(1852-1908)、J.ミルン(1850-1913)といった西欧人研究者に始まり、坪井正五郎(1863-1913)や小金井良精(1859-1944)、鳥居龍蔵(1870-1953)など第一世代の日本人研究者の間でも論争が繰り広げられた。この論争は「コロボックル・アイヌ論争」として知られている。

この論争の過程で、1888年には、帝国大学からの命を受けた小金井と坪井が7月から9月におよぶ長期の北海道調査旅行を行なってい

考古學者或人類學家所認為的愛努民族

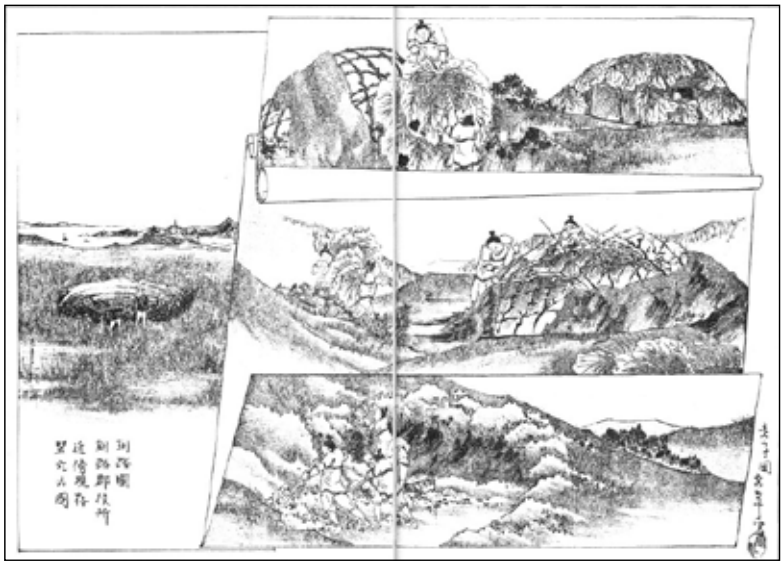
北海道島因本身文字資料有限，因此在解析歷史時，考古學發揮了重要的角色功效。另一方面，北海道島的歷史建構，立基於考古學資料，所以未從應為該島歷史當事者的愛努民族觀點進行描述。北海道島的歷史多從他者視點描寫而來。

北海道島的原住民族為愛努民族，在近代國家日本，從人類學或考古學誕生的19世紀末起，愛努民族便一直當作研究對象。誰是日本列島的石器時代人這項爭論，從E.S.Morse（1838-1925）與 H.V. Siebold（1852-1908）J.Milne（1850-1913)這些西歐研究者起頭，坪井正五郎（1863-1913）與小金井良精（1859-1944)、鳥居龍藏（1870-1953）等第一代日本人研究者之間便爭論不斷。這個爭論就是知名的「Korpokkur Ainu爭論」。（譯者註: コロボックル / Korpokkur 為愛努語，意思為款冬葉下的人，也就是小矮人之意。）

這次爭論過程中，1888年時，小金井與坪井受命於帝國大學，從7月到9月進行長期的北海道調查旅行。小金井在此次調查與隔年調

千島アイヌと写る日本人研究者たち
後列左 小金井良精、後列右 坪井正五郎、
前列右 鳥居龍蔵（1899年12月東京にて撮影）

與千島愛努人合影的日本人研究者們
後列左：小金井良精、後列右：坪井正五郎、
前列右：鳥居龍藏（1899年12月攝影於東京）



坪井により復元されたコロボックルの生活風俗（出典 坪井正五郎『コロボックル風俗考』(1895-1896）より）

坪井所復原的korpokur生活風俗（資料來源 坪井正五郎《korpokur 風俗考》1895-1896）

る。小金井はこの調査と翌年の調査で100体を超えるアイヌ遺骨を収集し、生体計測の調査も行った。一方の坪井は遺跡や遺物を収集調査し、古老からアイヌ民族の伝承を聞き取り、また女性の刺青の調査も行った。

アイヌ民族を研究対象として見る日本人研究者の眼差しは、その後も20世紀を通じて継続してみられる。1950年代には「アイヌ考古学」という概念が駒井和愛(1905-1971)によって提唱される。しかし研究者の関心はアイヌ民族とその文化を古代研究のカタログとしてみなす点にあり、真にアイヌ民族の立場からアイヌ民族の歴史を明らかにしようとするものではなかった。研究する者とされる者との壁、主体者不在の研究論争は1980年代まで強い影響を残した。

查中、收集了超過100具愛努族的遺骸，也進行活體量測的調查。另一方面，坪井調查收集遺跡與遺物，從耆老聽取愛努民族的傳承，另外也調查女性的刺青。

日本人研究者將愛努民族看作研究對象這種視點，我們可看到也延續到之後的20世紀。1950年代駒井和愛（1905-1971）提倡「愛努考古學」這個概念。但是研究者關心的是將愛努民族與其文化看作成古代研究的型錄（catalog），並非真的從愛努民族的立場去闡明愛努民族的歷史。研究者與被研究者之間的隔閡，主體者不存在的研究爭論到1980年代為止仍下強烈的影響。

空間の記憶とアイデンティティ

遺跡の発掘は、忘れ去られた祖先の歴史を記憶の彼方から呼び覚ます。1983年から85年にかけて北海道中央部の沙流川流域では、二風谷ダム建設の事前発掘調査が行われた。この発掘調査の結果、17世紀後半の火山灰の下から13軒の建物や墓で構成されるkotan（村）の後と儀礼空間と想定されるcasi（柵、砦）の跡が2カ所確認されている。casiについては、従来からユオイ・チャシとポロモイ・チャシという名でその存在が地元でも知られていた。しかしその内部に大型のcise（建物）が存在したことは、発掘調査によって始めた明らかとなった。またkotanについては全く忘れられた存在であり、多くの刀や陶磁器など貴重な文化財が発掘されたのである。この調査結果は、地元のアイヌの人々に遺跡という、かつて祖先の暮らした場との精神的つながりを再確認させる役割を果たした。調査終了から4年後の1989年に、二人のアイヌの古老がダム建設のための土地の収用の差し止めを求める請求を行い、さらに1993年にはダム建設差し止めを国に求める訴訟を札幌地方裁判所に起こした。「二風谷ダム建設差し止め訴訟」として知られる裁判である。

周知のようにこの裁判によってダム建設自体を止めらることはできなかった。しかし建設の過程での国の対応が違憲であること、アイヌ民族は先住民族として自らの文化を守る権利、文化享有権をもつとことが判決によって示された。二風谷の事例は、考古学が地域の失われた歴史的記憶と文化的景観の可視化に大きく作用

空間的記憶與自我認同

發掘遺跡這件事，是從記憶另一方的遠端喚醒已遺忘的祖先歷史。1983年起到1985年在北海道中央部的沙流川流域，進行二風谷水壩建設事前發掘調查。此次發掘調查的結果，確認出17世紀後半的火山灰下有由13間建築物與墳墓所構成的kotan（村）的遺址，與推測為儀式空間的casi（柵、砦）的遺跡這兩處地點。關於casi，從前就存在有yuoi casi與poromoi casi的名稱，也被當地人所知。但是其內部存在過大型cise（建築物）這件事，是透過發掘調查後才首次為世人所知。另外關於kotan它的存在則完全被人遺忘，並發掘出許多刀與陶瓷器等重要的文化遺產。這次調查結果對當地愛努族的族人們來說，遺跡的角色是發揮了再次確認與過去祖先生活場所之間的精神上聯繫功效。調查結束之後過了4年，1989年，兩位愛努族的耆老提出請求並要求中止徵收水壩建設用地，進一步1993年於札幌地方法院對國家提出訴訟，要求中止水壩建設。這就是眾人所知的「二風谷水壩建設中止訴訟」的審判案件。（譯者註：チャシ／casi為愛努語，日文漢字為柵、砦的意思，接近中文的寨、堡、社之意。）

眾所皆知這次審判並未能中止水壩建設本身。但是建設過程中國家應對方式為違憲這件事，顯示出判決認為愛努民族以原住民族身分，具有守護自身文化的權利、文化享有權。二風谷的案例明顯表示考古學對於地區失去的歷史記憶與文化景觀的可視化，具有相當大的作用。可以說這顯示出考古學可為再確認原住

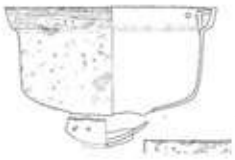
することを明示している。考古学は先住民族と土地との結びつきを再確認される道具となりうること、物語の復元に大きく貢献することができることが示されたといえる。

民族與土地之間連接的工具，對於還原史事具有相當大的貢獻。

ポロモイチャシから出土した当時の社会を物語る出土資料

從poromoi casi出土的出土資料敘述出當時社會

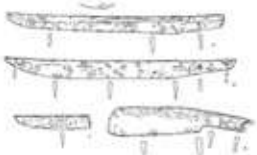
絵唐津大皿　繪唐津大皿



内耳鉄鍋　内耳鐵鍋

小札　小札

銅製縁金　銅製緣金

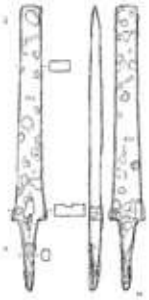


小刀とナタ　小刀與鍥

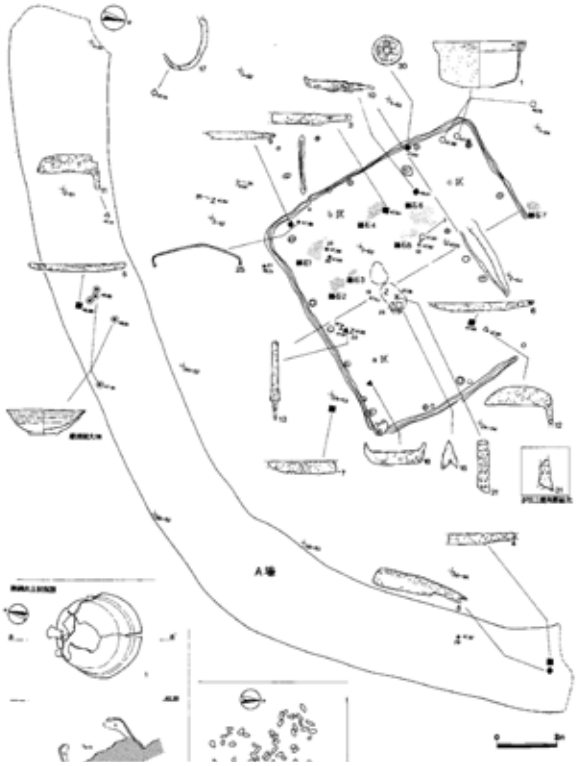
元祐通宝　元祐通寶

キテ　銛

レウケマキリ　reuke・makir



平ノミ　平鑿



陶磁器：絵唐津大皿：16世紀末から17世紀初頭
鉄製品：内耳鉄鍋（一文字湯口）：15世紀から17世紀前半
工具：平ノミ、レウケマキリ
漁撈具：キテ
兜・鎧の一部：小札、鎧兜の縁金
銅銭：元祐通宝（北宋1093年鋳造）

陶瓷器：繪唐津大皿：16世紀末起至17世紀初頭
鐵製品：內耳鐵鍋（單點鑄澆口）：15世紀起至17世紀前半
工具：平鑿、 reuke・makir（前刃彎曲的愛努短刀）
漁撈具：銛（魚叉）
頭盔 鎧甲的一部份：小札、鎧兜的緣金
銅錢：元祐通寶（北宋1093年鑄造）

（出典　北海道埋蔵文化財センター（1986）より）
（資料來源　北海道埋藏文化財中心（1986））

アイヌ民族にとっての考古学

先住民族から見て考古学は、文字資料に残された自らの祖先の歴史を知る手段として有効な手段となりうる。しかしこれまでの北海道島での考古学は、アイヌ民族のために、アイヌ民族との対話の中で研究を行ってきたと言えるであろうか。出土遺物は自ら語りはしない。個々の資料に名前を与え、文化名を定義するのは考古学者である。しかし、その過程でアイヌ民族の声や意思は、どの程度研究に反映されてきたのであろう。

近年、アイヌ民族から研究目的で発掘され、収集された祖先の遺骨の返還を求める声があがっている。墓や遺骨の発掘は過去の研究に限ったものではない。現在も開発に伴う発掘調査の過程で未知の墓が確認されている。祖先の遺骨の問題は考古学とも深く関係する問題なのである。先住民族の権利を踏まえれば、アイヌ民族不在の歴史文化遺産の調査や保存管理は、文化遺産の収奪

遺跡調査前に行われたカムイノミ（2013年7月 礼文島浜中2遺跡において）

調查遺跡前進行kamui nomi（祈神儀式）（2013年7月 於禮文島濱中2遺跡）

愛努民族所認為的考古學

從原住民族來看，自己祖先的歷史殘留於文字資料，考古學作為了解祖先歷史的方法，可成為有效的手段。但是至今為止的北海道島的考古學，一路以來所進行的研究可否能說是為了愛努民族並有與愛努民族進行對話。出土遺物自己不會說話。給各個資料賦予名字，定義文化名稱的是考古學者。但是，在這個過程之中一路下來，到底又反映出多少程度的愛努民族的聲音與意見呢？

近年、愛努民族開始出現許多聲音，要求歸還以研究目的所發掘收集到的祖先遺骸。墳墓與遺骸的發掘不僅限於過去的研究。現在也因隨著開發會有發掘調查活動，在調查過程之中有確認出未知的墳墓。所以祖先的遺骸問題，可說是與考古學之間具有深厚關係的問題。立足於原住民族權利的話，可能會被批評成愛努民族不存在的歷史文化遺產調查，或是批判為保存管理是奪取文化遺產與破壞文

や文化的景観の破壊と批判される可能性がある。

今、北海道島の考古学に何が求められているのであろうか。その答えはアイヌ民族の研究への参画の機会を考古学者側が積極的に作り出す姿勢であり、アイヌ民族との間に信頼関係を構築し、研究成果の共有を通じた対話を続けることではないだろうか。◆

化景觀。

今日，北海道的考古學到底想要追求什麼呢?這個答案應該是考古學者方面，需以積極的態度去製造愛努民族研究的參與機會，與愛努民族之間建構出信賴關係，才能透過共享研究成果，持續進行對話。◆

作者簡介｜プロフィル

加藤博文 KATO Hirofumi
北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授

1966年北海道夕張市に生まれる。筑波大学大学院博士課程歴史人類学研究科単位取得退学。1990年から1991年にかけて旧ソ連政府奨学金留学生としてイルクーツク国立大学に留学。1996年から1998年まで日本学術振興会特別研究員。その後筑波大学大学院修士課程地域研究研究科文部技官に就任（2000年まで）。島根県立大学を経て、2001年に北海道大学大学院文学研究科北方文化論講座助教授に着任。2010年より北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授。専門は考古学。センター着任以降、先住民考古学を北海道で実践することを試みている。著作として、*The Ainu and Japanese Archaeology: A change of perspective*, Japanese Journal of Archaeology, Vol.4 No.2: 185-190 (2017), 「アイヌ考古学とパブリック考古学」、『季刊考古学』第133号、雄山閣、pp.72-75 (2016)、Mayumi Okadaとの共編で*Indigenous Heritage and Tourism: Theories and Practices on Utilizing the Ainu Heritage. Center for Ainu and Indigenous Studies*, Hokkaido University, Sapporo (2014)、鈴木建治との共編で『新しいアイヌ史の構築：先史編・古代編・中世編』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、221頁、札幌(2012年）など。

加藤博文 KATO Hirofumi
北海道大學愛努 先住民研究中心教授

1966年北海道夕張市出生。筑波大學大學院博士課程歷史人類學研究科取得學分休學。從1990年到1991年以舊蘇聯政府獎學金留學生身分留學於伊爾庫次克國立大學。從1996年到1998年擔任日本學術振興會特別研究員。之後任職於筑波大學大學院碩士課程地域研究研究科文部技官（2000年為止）。歷經島根縣立大學，2001年就任北海道大學大學院文學研究科北方文化論講座助教授。2010年起為北海道大學愛努 先住民研究中心教授。專業領域為考古學。任職於中心之後，嘗試著於北海道實踐原住民考古學。著作方面有，*The Ainu and Japanese Archaeology: A change of perspective*, Japanese Journal of Archaeology, Vol.4 No.2: 185-190（2017），〈愛努考古學與公衆考古學〉、《季刊考古學》第133號、雄山閣、p.72-75 (2016)、與Mayumi Okada共編*Indigenous Heritage and Tourism: Theories and Practices on Utilizing the Ainu Heritage. Center for Ainu and Indigenous Studies*, Hokkaido University, Sapporo （2014）、與鈴木建治共編《新愛努史的構成：先史編 古代編 中世編》、北海道大 愛努 先住民研究中心、221頁、札幌（2012年）等。